

戦後の児童詩教育論争(一)

足立悦男

一 一九六一年の児童詩界の話題をさらったのは、「しにん」という児童詩であった。一篇の児童詩作品「しにん」と出合ったときのことを、松本利昭は次のように述懐している。

△「しにん」の作品は、ザラ紙を四つにきったおおきさの紙に、実にへたくそな字でかかれてありました。こういうザラ紙にかかれた作品が五十篇くらいもありましたでしょうか。この作品をえらびましたときの記憶はあまり明瞭ではありませんが、他校の作品を二、三百篇くらいよんで、そのあとで緒方映児先生からおくられた生原稿にとりかかりまして、そのなかから、まさに、科学者があたらしい物質を発見しましたときのように、一篇、みつげだしました作品なのです。V^①

児童詩「しにん」は、長崎県大島東小学校六年生、森山俊朗の作品で、指導者の緒方映児によると、六年三組の卒業記念文集「西海の子」第十号（一九六一年三月二〇日発行）に収録されているというが、そのまえに作者によって書き写されて、「詩の手帳」と『作文と教育』に投稿されている。そして、松本利昭がその作品を『詩の手帳』一九六一年二月号にのせたことから、異聖歌とのいわゆる

「しにん」論争がはじまったわけである。
児童詩「しにん」は、次のような作品であった。

しにん

森山 俊朗

ささおか君がしんだ
やきばくかまがありがと(い)いう
ように

ひをだしながら

たべた

ついにささおか君わ(い)わ

ほねになってでてきた

かまがどうもありがと(い)うたように

きえた

ささおかくんわ(い)わ
いた(い)た

ほんに

ささおかくんわ(い)わ

たまし(い)になつて

やってくる やってくる

けらいもつれて

ばくもやられそつだ

さよなら おれわ (は) こんだわ (どは)

おかざきを

ねらうぞ

「しにん」論争は、直接的にはこの作品の評価をめぐる論戦であるが、ひとり「しにん」の詩にとどまらず、児童詩そのものに何を視ていくのか、といった児童詩教育の根幹を問う論争でもあった。

その経過をつぶさに検討していくために、まずこの作品の載つた『詩の手帳』一九六一年二月号の、松本利昭の「作品評」の全文を次にひいてみる。

△「しにん」これは妖気に充ちた作品である。ザラ紙に、まがりくねった、たどたどしい字でかかれたこの作品の生原稿をよんだとき、はじめ、ギョツとし、それから、ぞおっ、とした。

これがこどもの詩であるだけに、いわゆる児童詩をみなれてきているだけに、こどもの詩とはおもえない、観念論的というなら人間執念のふかき、こどももおとなもかわらない自我の底にひそむ残酷さをかんじた。ここには、現在の児童詩、いわゆる生活風景写生詩のもつ俗臭紛紛はひとかけらもない。ささおか君、そしてこんどはおかざき君をねらう作者の、意識の底にうごめいている残忍酷薄な人間感情こそ、人間がだれしも抑圧され、もっている自我意識のひとつだ。

それが、ユング流にいうなら、人間が集合的無意識としてもつ

ている唯心論と、現実社会から無意識的に身につけた仏教的地獄とがむすびついた思考とに結合して、あらわれてきている。現実の社会秩序にしたがって生きていこうとする生活意識に抑圧された、奔放な人間本来の自我の爆発である。作者である森山俊朗君の自我の強烈な主張である。そして解放である。

この作者は、おそらく逢って顔を見るまでもなく、どこにでもいる、あかるい顔をした日本のこどものひとりである。家でも、学校でも、はつらつとしてとびまわっている少年にちがいない。私は、この作者がこういう作品をかいたからといって、頑固な教育者面で、この子の人間形成をうたがうものでもなければ、また、こどもにありがちな、こどものつくりばなしとして、これを没にしてしまいたくはない。

この作者は、こういう作品をかくことで、より精神的にも肉体的にも、自己を解放して、すくすく成長するだろうと信じている。作者森山君は、昨年の本誌九月号の「し」という作品で、しをかけ、しをかけ、という先生や父を「だからおとなはしがないのだ。やい、しのきちがいの先生」と痛烈にやっつけている子だ。詩精神をがっちりつかんでいる子だ。V。

この松本の「作品評」の中に、すでに「しにん」論争は準備されていたも同然であった。松本は、この作品を「人間執念のふかき、こどももおとなもかわらない自我の底にひそむ残酷さ」、あるいは「作者である森山俊朗君の自我の強烈な主張」と評し、自我意識のストレートな解放の点に、この詩の核心をみてとろうとする。死人という題材の奇異性にとらわれないで、題材の奥に自我の解放とい

う衝動をみつめて評価しているわけである。

そして松本は、「頑固な教育者面で、この子の人間形成をうたがうものでもな」とし、懸念される否定的評価を先取りしてつぶしておこうとも考えている。松本の中に、この作品もたらず反響への予想がはたらいっていたとみてよい。じつ、この頃の「詩の手帳」の大組みの作品（巻頭詩）をめぐってみても、これにすぐる異色作をみいだすことはない。

ちなみに、「昨年の本誌九月号」「詩の手帳」一九六〇年九月号に載った、同じ作者の作品とは、次の詩である。「しにん」論争と共通する問題性をはらんだ作品と思われるので、参考までに引いておきたい。

し

森山 俊朗

先生はよくぼくたちをばかのように、しをかけ、しをかけといつてとてもやぐらしい。あんな先生など、東小からでていけばよいのだ。ぼくだけではない、よくだれかが、しはいやだ、しがわるかったらおこるし、あ、なんとという先生だ、らい年はでていくかもわからない、らい年の人はいいな、あ、はやくでていけ、きれたいいは、しきちがいの先生、家にかいて、そのはなしをする、父は、よいじゃないか、おまえたちをえらくしようとおもっているのだ。だけどちがう、だけど父もぼくのことをあんまりしんようしない、もしかしたら、しがすきかもしれない、父や、先生などばかだ、だからおとなはしががないのだ、やい、しのきち

がいの先生。（原文のまま）

この作品について松本は、作者のくつたくな意表示のしかたを評価し、「森山君のいかりをぶちまけた作品こそ、ほんとうの詩だ、これこそ、よい詩である」「詩の精神であるところの、なにものにもとらわれることのない自由なきもちが、じゅうおうにみなぎっているではありませんか」「詩の画廊」と絶賛している。しかし、この評価をそのままつべなうわけにはいかない。この「詩」は、たしかに「いかりをぶちまけた作品」といえるが、怒りの表層がなぞられているだけで、怒りの内実がいつこうに伝わってこない。構成も粗雑きわまりないものである。その点で、同じ作者の「しにん」の質の高さとは、くらべようもない作品といわねばならない。松本にとつても、このことは承知のうえであったと思われる。にもかかわらず、絶賛したのは、この作品のもつ非「教育性」の一点ではなかったか。そして、この一点こそは、これまでの児童詩教育における暗黙の忌避にふれるもので、「しにん」論争の大きな争点でもあった。

二

さて、かくして異色の児童詩「しにん」は、「詩の手帳」一九六一年二月号に発表された。

この作品についての最初の批評は、「作文と教育」同年三月号の世古一弥の一文（教育誌の窓―2月号から）である。その中で世古は、次のように批評している。

△「詩の手帳」(日本児童詩の会)を久しぶりに読んだ。はじめに秀れた詩として三篇の詩がのっている。最初は「ゆうれい」、つぎが「崇福寺」、おわりが「しにん」である。どうも、あまり、勝手が違ふので、しらみつぶしに読んだ。私の手に負えないから、会員のAに読んでもらったら、きのう感想が送られた。Aは「読んでみて驚いた。選ばれているのが、みんな「ゆうれい」「お寺」「しにん」である。ここだけで見ると、怪談が詩であると信仰している人が選をしているらしい。児童詩教育をさかんにすることはいいが、これではまちがった教育をすることになる。子どもを精神病にするものだ。この編集者は、ゆうれいにとりつかれていると見えて、児童詩教育史もわかっていない。……中略……」とちなみに、「ゆうれい」「お寺」の詩とは、次の作品である。

無題

松本 謙治

ぼくはゆうれいになって

7まんえん

ぬすみました

ぼそぞんと

けえました

崇福寺

崇福寺の門は龍宮の門だ

升永香代子

上をむくと門でかこまれている
はやしもそうだ

崇福寺は門だらけだ

ガイドさんが人魚だ

わたしたちが こぶんだ

木が こぶのかわりだ

それをぜんぶあわせると

うらしま太郎の物語になる

これらの詩もふくめて、さきの批評は、「しにん」に象徴される詩的世界が、わがくにの児童詩の風土の中でいかに異色なものであったかをのたっている。この文章にみられる途惑いや怒りは、その意味で、むしろ当時の一般的な、そして正直な受けとめかたであったといつてよいのかもしれない。ただ、その途惑いや怒りが、作品の内実に立ち入ってのそれではなく、たぶん児童詩の素材的タブーに触れた点にむけられている事実も否定できない。このことから逆に、児童生活詩の側の素材観の脆弱な一面がのぞけることになったともいえる。

当の「しにん」の詩の指導者、緒方映児は、のちに「くたばれ、生活つづりかた詩」「詩の手帳」一九六一年一月」という文章を書いて、その中で、世古の批評について「私のようなお人よしでもさすがに激憤をおぼえた」と、反駁している。

緒方の「激憤」は、しかしあくまで世古の一文に向けられたもので、生活詩派そのものに向けてのものではなかった。というのも同

じ文章の中で緒方は、「しにん」論争の生活詩派のもう一人の当事者、異聖歌に対しては、次のように述べているのである。

△その後、異聖歌先生からおたよりいただき、たいへんその文集には一学校一作品の主義のため一作品しかとれないが、のった作品をそのままするにはしのびない。だから、「作教」でとりあげるから了承してくれ、という意味のことだった。先生は、小学校の審査員であった。「赤い鳥」の自然的な感覚の洗練されたすぐれた童謡作家でもある異聖先生が、シュールレアリスムのな作品である「しにん」とか「血」とかの作品をとりあげていただいただけでも、たいへんな進歩であろう。▽

この述懐は、「しにん」他の作品を『作文と教育』の年刊詩文集に応募し、それらが異聖歌の目にとまったという事情をふまえている。ここで緒方が、「しにん」をみずから「シュールレアリスムのな作品」と評し、それに目をとめてくれた異にたいして、「とりあげていただいただけでも、たいへんな進歩であろう」と述べていることは、注目される。この言のうらに、生活詩派の指導者である異が、よもや「シュールレアリスムのな作品」を好意的に評価してくれるはずはない、といった懸念が緒方にあったことは、容易に推察できる。この当時（一九六一年）の児童詩状況の微妙な一面をうかがわせる一事といえる。

異聖歌は、『作文と教育』の一九六一年四月号より「新しい児童詩の発展のために」と題する連載（全六回）をはじめているが、その第四回「素材の発見とその追求」（『作文と教育』一九六一年七月）

において、約束どおり「しにん」をとりあげたのである。異は、そこで、投稿されてきた緒方学級の詩群から、次の三篇を引用している。

テロの国といわれたくない

真子よしの

日本は「テロの国だっ。」と

外国からいわれる。

ほんとうに日本は、

「テロの国だっ。」と誰かがいった。

長崎県の人が女中さんを殺し、

おくさんをきつつけた。

もし私達の組のある男の人が、

よその組の男か女の人を殺したら、

私達の組は学校の人から

「この組の人達は、

人殺しの組よ。」といわれるだろう。

私は恥かしゅうて顔をあわせられない。

日本はほんとうに

「テロの国」といわれても

恥かしゅうないとやろうか。

いくら十七才の人でも

殺したときには、

えんりよせんで死刑にすればよか。

まえに浅沼さんがえんせつしているときに殺された。
浅沼さんはくやしかったろう。

私は日本は、

テロの国民だといわれたくない。

血

金ヶ江良一

血だ。

えのぐだ。

まっさおな顔だ。

肉のようなにおいだ。

死んだ。

えのぐのような血だ。

血は赤いばらいろのようだ。

血は赤い。

血はまよなかの血だ。

血はおそろしい悪魔だ。

死

森山 俊朗

ささおか君が死んだ。

焼場のかまが、

「ありがとう」というように、

火を出しながら食った。

ついに、ささおか君は
骨になって出てきた。

かまどが、

「ありがとう」といったように消えた。

ぼんに、ささおか君は、

たましいになって、

やってくる、

やってくる、

けらいも連れ、

ぼくもやられそうだ。

さようなら。

おれはこんだは

おかざきをねらうぞ。

問題の「死」の作品については、のちに松本利昭から「改作」したとして非難を受けるが、それについて、巽の明かした「事実」は、次のようであった。

△私のところにある原稿は、行切りも、原稿の書き方もできてない。あとで見た「詩の手帳」の「わかち書き」など、びっくりしているが、ほんとうだろうか。この子にそんなことなど、とてもできそうにない。……中略……題名は、「死」の方が近いかと思つた。いま考えれば、「復讐」なんていう方がよかつたかも知れないが、考え直している時間がなかった。これでも、公開の雑誌で恥をかかされるより、題名の変化で、指導者がはっと気づいて

くれれば、いいと、気をつかって書いたつもりだ。V。

この「改作」問題は、作品が二重に投稿されていたことでわかたわけであるが、異に「内容まで変えるようなことをしないが、私は、こういうことをよくやる」といった発言もあるので、この是非はまたべつの場合で問われるべきかと思う。

さて、緒方学級の三作品をひいて、異は、次のように批評した。

△浅沼事件、嶋中事件については、たくさんの詩がある。けれども、ここまで昇華された作品は、まだ見あたらない。「テロの国」といわれたくない」は、いわゆるインスタント的ではあるけれども、犯人が長崎県人だったということで、身辺につけて考えているところに、真实性が出ている作品だと思う。「血」は、そういう事件からの連想らしい。こんなショックを与える授業の可否よりも、新聞やラジオで報道されているのだから、これはもう問題にならない。「死」は、そんな事件からの関連からか、ともだちの火葬から、その亡霊にとりつかれて、しまう。それでおしまいは、自分もこの世から「さよなら」をしてしまい、今度は別の友人にとりついてやろうと思う。

無気味な詩だ。詩は、ここまで、指導して、いいか、どうか。これは問題だ。V。

引用文の傍点部分が、のちに問題とされる。この批評は、正否の評価のいずれともつかぬようであるが、そのゆれにこそ異聖歌の位置があった。そもそも異が、この連載「新しい児童詩を求めて」をはじめたのは、当時の児童詩状況に対する激しいいらだちを感じていたからである。その頃の児童詩の総体を「インスタント児童詩」

と決めつけ、その風潮を厳しい批判にさらすための連載であった。

「インスタント児童詩」とは、「内容把握の類型化、表現形式の固定化、発想の卑俗化」の段階にあまんじる児童詩作品をさしての異の言である。この「インスタント児童詩」論は、当時の児童詩状況一般に対する批判であったが、と同時に、そういった児童詩状況の中にいる異自身をも斬る、いわば憂う、つなる自己批判でもあった、とわたしには思われる。児童詩教育運動への、老大家による内部からの批判とみると、沈痛きわまりない声であったといえよう。

このように異の真情を汲んだうえで、緒方学級の作品評をみると、その評価のゆれは、異聖歌という老詩人の批評者としての誠実さの表われと受けとめることができる。「テロの国といわれたくない」の素材の迫り方への評価は、この作品が一応生活詩の流れにあるとみられる点で当然の批評といえるが、「血」「しにん」という奇怪な作品に対して、指導者に手紙まで出して連載の中で引用したことは、異の内部に、これらの児童詩に何らかの可能性を見出したからに他ならない。異はこのとき、生活詩と生活詩を超える可能性を秘めた児童詩とはさまにあって、みずからの児童詩観のゆれを実感していたのではなかったか。この児童詩観のゆれは、異にとって憂うつなものであったと思われるが、児童詩の詩的価値を第一義的に考え、それに敢えて従った評価として、史的にみて貴重な判断であったといえるであろう。

右の引用につづいて、異はこうも述べている。

△しかし、そういう齟齬はありながらも、ひとつの素材について、これだけの変化のある扱いをし、展開を見せてくれた指導者の力

量というものは、わたしはこれを高く評価したい。詩というものは、所詮は「見たままを見たまま」書くのではなくて、いちど自分の感覚なり肉体なりをおして、それを咀嚼して吐き出すものだからだ。そこで獨創性が發揮され、当人の詩が生まれてくるものなのだ。V○

この一節は、明らかに「しにん」の詩的世界にふれて、ひきだされたものであるが、指導者みずから「シニールレアリズム的」とする詩的世界を、生活詩派の長老詩人が認めたとという事実よりも、「しにん」の魅力に忠実であつた異聖歌の児童詩観の確かさの方が重い。この一節はまた、「見たまま」を書く生活詩の手法にとつても、かなりきびしい自己点検を強いるものでもあつたはずである。同時代の児童詩状況に対する、異聖歌のいらだちとこの点は、無縁ではない。

三

異聖歌の「しにん」評「素材の発見とその追求」が載つたのは、「作文と教育」一九六一年七月号であり、それをふまえて松本利昭は、「詩の手帳」同年九月号に「しにん」と題する異聖歌批判の文章を書いた。それに対し異は、「作文と教育」同年二月号に、「児童詩の理想像——「しにん」論議をめぐって」という文章を書く。この一連の応酬が、いわゆる「しにん」論争の中核である。

松本の異批判は、大きくは三点に及ぶ。「改作」問題、「事実」問題、そして児童詩の教育性をめぐる問題の三点である。このうち一点めの問題は、さきに述べたように二重投稿によって生じたことな

ので、ここではふれず、残る二点に論究しておきたい。

第二点めは、異がこの詩を「ともだちの火葬から、その亡霊にとりつかれてしまう」と述べ、友人の死を「事実」と理解したことへの反論であつた。これに対し松本利昭の解釈は、当初より「空想の詩」という前提で、作者の劣等感のうんだ「意識のなかの殺人」と考へていた、というものであつた。この点は、松本論文の中で、「詩の手帳」編集部よりの問い合はせに答へた指導者緒方の返信が載つたことで、「事実」でないことが明らかになつた。作者の交遊関係も、この返信によって明らかになり、次のようであつたという。「岡崎」は、いわゆる秀才タイプの少年で、鍼業所病院医師の一人息子、「森山」と「笹岡」はともに鍼業所職員の子どもで、成績は「中位の上」ということである。作者は、「常にはあかるく、快活で、多弁であり、ややさびしがりや」の性格らしく、ある日、「優秀児」のそばに行つて、注射器で脳を吸いあげるまねをし、それを友人に注射するまねをして、「おまえに、○○君のノームンはいれたけん、テストのようになるぞ」と、ふざけていたことがあつたそうである。このようなことから、指導者緒方は「しにん」の詩の背景について、次のように推定している。

△私は「しにん」の詩は、彼が人生のすべての心の排泄物、心のゴミ、苦しみをひねりだしたものだと解釈しています。……彼等の人間関係は、競争意識、対立意識の強い反抗の鍼員、職員の問題、それと職員間の見栄の張り合いの犠牲者、それが、森山の精神発露のきっかけとして「しにん」の詩ができたともかんがえられます。V○

作者の身辺からのこの証言は、松本のいう「意識のなかの殺人」の評をかかなりの部分うらづけている。では、これによって巽の論点はずれさったのであろうか。松本への反批判「児童詩の理想像」の中では、巽はこの点について何一つ言及していない。言及できなかったのではなくて、言及しなかったたのである。児童詩の背後に、つねに生活的事実のうらづけをみつづけていた、つまり、生活的事実によって保証されていた児童詩教育のにないであった異聖歌にとつて、この「事実」問題は、みずからの児童詩観を超えた次元での批判とうつつたにちがいない。しかも、「インスタント児童詩」批判のために、敢えて選びとつた作品の批評において受けた批判であつただけに、語られざる衝撃は大きかつたものと推察できるだろう。

こうみてくると、この論争は、第三の点、「しにん」をめぐる教育性の問題にしばられてくる。巽は、「しにん」の「獨創性」を評価しつつも、「無気味な詩だ。詩はここまで指導していいかどうか。これは問題だ」^⑧と、指導者の教育的見識を問う発言をしていた。この点に対し、松本利昭は、「ここをつきぬけて指導することこそ詩の指導ではないでしょうか」と反論をくわえて、「しにん」の詩的源泉とみる「コンプレックス」(劣等感覚)の教育性を、逆に次のように主張するのであつた。

「劣等感覚そのものは、病的ではない。このコンプレックスを人間性の変革にまで、自己変革にまでたかめるか、まけてしまうかによつて、病的か、否か、がきまるのであつて、むしろわたしたちは劣等感覚こそ、自己の人間形成にむかつて、猛烈にたちあが

ることができるとエネルギー、ファイトの源泉である、といえるとおもつている。その劣等感覚の腐敗を、表現することによつて、意識の世界から、現実の世界へ文字表現したところに、この作者の詩精神があり、そしてその詩精神が文字表現されたものこそ詩とよばれるものであり、またそのように自己を解放したことによつて、腐敗をえぐりだしたのであるから、そういう意味では、健康そのものであり、このような指導こそ人間性の教育であり、またそれこそ詩による教育、いしかえると、教育と芸術の両方の本質の合致点ではないだろうか。V^⑩

両者の対立点がきわだつのは、この「児童詩の教育性」をめぐる争点においてである。松本は、右の引用でわかるように、児童詩における素材的タブーを認めず、詩精神の十全の発露といつた点のみ作品評価の主眼をおく。当時の児童詩状況からみて、きわめて前衛的挑戦的な児童詩教育論であつたといえるが、それも、一篇の詩「しにん」との出合いによつて触発された面も強いだろう。

一方、異聖歌はどうか。異自身も、一連の「インスタント児童詩」批判にみられる如く、一九六〇年代初頭の児童詩状況に否定的であつた。それは、児童生活詩の「類型化、固定化、卑俗化」へのいらだちからくるものであつたが、それとともに、かつてのモラルシユな立場のみでは律しきることのできぬ、児童詩の新しい息吹きを実感しつつあつたからではなかつたか。そう考えると、「インスタント児童詩」批判にしても、緒方学級の詩群への評価にしても、みずから歩んできた児童生活詩に内在する負性の抽出を意図したものとみることができるといえる。巽の「しにん」評は、少なくとも異内部の、

そういった苦悩の現われを受けとめられるべきであった。

松本論文への反論となると、したがって、

△私の「ここまで指導していかどうか」というのは、「テロの国といわれたくない」から「血」「しにん」「崇福寺」と進行していく、ネガティブな指導だ。……そういう、私の鑑賞眼を擲喩されたようだったが、私たちはそういう妖怪めいた空想なり、抽象世界だけを書くような詩を小学生に奨励していない。現実という大地に足をつけて、義務教育をおえただけでも、りっぱな考えをもち、健康な生活をいとむような子を育てたいと思ってる。V。

のように、「しにん」評価においては、明らかに後退している。ここにみられるのは、「しにん」の詩を拒絶し、「しにん」の詩を生むような詩教育を否定する、きわめて割り切りのいい保守的な立場の直言である。あの、半ば否定しながらも、「しにん」の詩の創造的価値について語った老詩人の、魅力的な憂うつなる表情は、ここにはない。このあと異は、公的な場で「しにん」の詩について語ることはない。

「しにん」論争にこのような結着がつけられたことで、異聖歌の児童詩改革の試みも、児童生活詩の内部に対する刺激的発言といった域を出ることなしに終わってしまった、とみてよい。しかし、ともに「人間の詩教育」を標榜する、異聖歌と松本利昭の児童詩教育論の対決は、このような形で終焉したとはいえ、児童詩教育における「芸術性」（詩的価値）と「教育性」（教育的価値）という、古くて新しいアポリアの存在を、改めてきわだたせてくれたことは確

かである。その意味では、「しにん」論争の途上でみせた異聖歌の憂うつなる表情は、一九六〇年代の児童詩教育界における、このアポリアをめぐる「児童生活詩」と「主体的児童詩」とのぬきがたい対決への、悲しい予告でもあったわけである。

——注——

- ① 松本利昭「子どもの欲望を掘りおこそう」（一九六二年一月）
- ② 松本利昭「しにんV評」（『詩の手帳』一九六一年二月）
- ③ 世古一弥「教育誌の窓——2月号から」（『作文と教育』一九六一年三月）
- ④ 緒方映児「くたばれ、生活つづりかた詩」（『詩の手帳』一九六一年一月）
- ⑤ 異聖歌「素材の発見とその追求」（『作文と教育』一九六一年七月）
- ⑥ 同右
- ⑦ 同右
- ⑧ 松本利昭「しにん」（『詩の手帳』一九六一年九月）
- ⑨ 同右
- ⑩ 異聖歌「児童詩の理想像——「しにん」論議をめぐって」（『作文と教育』一九六一年二月）

（大阪教育大学助教授）